山縣有朋関係文書

越の山風

毛利家記録所所蔵

二、三、

山縣有朋 憲 12

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

国立国会
26.2.23
図書館

225778
225779

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

誌の山風壕き

余が相嶋に出張中請方面に於て行はれたる実戦につきては後に奇兵隊の報告書を抄出して其の梗概を示すべし此報告書は戦局の終結せる時に於いて余が奇兵隊の書記従りし長三州に命して取り纏めし

藩に尾出し翌年乙丑に藩より之を太政官に届出したるものなり（戦争の中より余が伯から猶して奇兵隊の報告書を作らしめたるは戦争中各藩より思ひ〳〵に尾出したる報告書の如く其体裁に一定して動もすれば過ぎて強人と実際と相合はさる所多々ありしを慨したる者ありきとは余は館

くまで奇兵隊の報告の確実なることを保証するなり。延て書時の状況を叙述と若くは論議したる書物相次ぎて世間へ公けにされたるも亦多くは右各藩の報告書を参照して材料をこゝに求めたるのみにして公文書によりて後世よりの当時のことを批断すれは甚敷くの誤なるは免すしも怪むに足らずと雖も事物の真相は大

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料（写本）12

何當隊とあるは、総へて奇兵隊を意味する
こと勿論なり。因に云ふ北越戦争に関する
報告書中蘆長相談の上調製せられ且つ蘆
長之鮮の名を以て届出されたるものは前
記五月朔日付の届書のみにて此の外には
絶て此の形式によれるものあらず。其の
後は蘆も長も別々に報告書を届出したる
なり。此の後長く茶を苦しめたる蘆長

と相違する右あるも奈何
の敵情等につきては条々
固より詳かならぬ右あるへく又誤まれる
右なきにあらふるべし。為のれとも今近来
の著述によりて一一之れを詳細にし君く
は訂正するのれきは独り其の煩に堪へさ
るのみならず又之の書を作るの目的れも
ふらふるなり。
さればこの文章中に於ける

の不折合の極点の戦の如
を発したることと見を以て
廿六日 戦と杉沢に至
死傷六人、徹退川を隔て、砲戦、午明戦
主る、如州兵文納に戦
廿七日 我の四番隊文納より赤坂に
接す赤坂は松代引請の砲台なり、長岡
の諸兵今明、見附に至
る、大面、小栗山12

戦ふ、兵校一小隊金
大河津の戦と對す、戦
する勢あり又金
兵校兵激戦飯山一
隊も山手に迫め半隊
踵を得間道より頻
打に我の後にあ
廿八日 我一番山隊一
番を番砲蔭、騎
我の兵退いてこ兵
我を守る

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

隊攻撃一小隊奥枝の兵に合し山手本
道より進撃、賊拒戦、戦勢甚鋭、官軍一旦敗
る迫めとも地形悪きを以て不利死傷
多し、故に両道ともも退きて奥枝に
原村、宮の元宮の落の下等にて戦ふ未
明賊退く、松代高田宇小隊飯山富山等応援す、報国
一小隊飯山富山を援ひ賊を追ふて陣
ヶ峰に迫み囲守す、此の日飯山攻撃を
奥不文故に休の砲隊大いに損害を受
く休の二番三番砲尾州
戦ふ、急前奥枝城内自ら出火す、一小隊奥枝方面に赴ける状況は右の如く頗る閑
心すべきものあるを以て、余は更らに至急
援兵を派遣するの必要あるを認め、五番田
と兼沢村とに在りたる高田兵二小隊をし
て取敢えず奥枝に繰り込ませ、又自ら兵

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

同に至りて囘斯に在りたる長州兵二小隊と今般来着したる薩州兵一小隊の四半小隊及び薩州の二砲門を併せ一軍隊に編成せんとの議を決し且つ杉山荘一郎を以て是等の諸兵と共に出張せしめたり尚ほ一方面も亦島崎迄に賊軍を要する状ありたるを以て、糸は相崎へ急報し囘斯にあるべき加州兵略ぼ同数を挙げて出雲崎に探

り出し出雲崎及び石地にある所の諸兵と共に其の方面を堅守せしめたり

翁は二十九日を以て出雲崎に着し翌三十日の明後一日の兵をして島崎及び小島谷の賊を掃蕩せしめ其の機を見て進撃せんとするの方略を決し賊情及び地形等を研究し保々々諸兵を指揮するを為めに三十日に伴藤傳之助を以て出雲崎に派遣しも且つ兵

二番山隊及び杉代一小隊と同所に陣うし尚伊藤の上にも ち て前
し命令を部署を指揮する為
め福田侠手も亦陣七しめ亦は巡査のこと
も協議し併七て敵の情勢を実見せん為め
自ら巡査に社復したり
六日朝ロには朝未だ雲先方面に霧りて敵
声を聞くこと頻りなりしを以て午候を葉
る峠に派したるも葉の故を知ること能わ

ずりしの後に巣丈の来
は右は え巡査より脇野
へ賊兵の 来したる
と杉山より左の書面
今暁賊兵サカを谷の方へ多を押寄せ
る通知 探には午
田鎌蔵一小隊出張尚今暁流野の陰を
実也は脇野所へ双出
録り出し申候葉他之の方面に屈州者

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

六月一日

おすほれし越路の雪も水無月の照る

日のかげにけふやとくらん

関原本隊　　帯板

山縣狂輔　様

杉山花一郎

岩村の帰り来りの話しによれば官軍は之

賊を討つゝ土を退けたる由なり然る処

敗に於ける賊ひにつきては未だ奇兵隊

田辺城の小隊も出張致居候得共細事念

いつも晩呂今高遠一小隊居出申候に

つき多分格別は有之間敷奉存候尤

昨日御話有之高尾洲兵脇野町へ御係

りまし可被遣哉若林は敵情も見届置

帰と申事に御座候尚後の模様も御知

御報申上候　　拝白

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の報告書を提出すべし

一 北白河明賊征討隊の一隊固守する赤坂の砲台に迫らんとするの報に接し、旧幕府脱走の賊と奮戦す、新賊四十七人生捕二人牌賊三小隊許逃潜を放火乱発す、赤坂の後に迫らんとす、林田藩半隊三番小隊薩州半小隊遊撃隊半小隊許、

一 新たに之を砲ち賊長沢に走る、

二日は、即ち出雲崎の号砲にて小島谷及び島崎辺の賊を攻撃すべき用なるに、朝来絶て砲声を聞かず且つ糸福田伊藻よりも何等の音信なきを以て出雲崎と矢投との状況を探索せしめたるに矢投より報知ありたるとの帰りて報するところによれば、出雲崎

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

より連つたる兵はいよ〳〵小島谷場まで進撃したりとのことなりしが日尺時なる弘前和勝より書面にて来攻猶備に於ける兵士の皆疲労到底して援兵の派遣を望むの意を告げ来りしを以て連隊長は直ちに之に応じ其つ連日の交戦に於て困て居峠にありなる打代庭州の二小隊に迫ちに之を回せり之は夜に

り今町の方に走りて失の手感に起り、唯事ならざる模様を以て、白井小介を長岡に遣はして状況を探聞せしめ又らに宮本あり七ら富山兵を呼び寄せ南郷一郎をして之を率いて本大富村に進ませ白井の報告如何に依りて直ちに河を渡りて赴き援くの用意を為さしめんにり迄のみにも右の兵の半の次に迫すの大敗も

事の想像し得らるる所なり

翌朝に至り長岡より、昨夜初めに報らされたるを報じ至急援兵の派遣を求め来れるも、已に今汀を取り返されたりとの事へば石狩地全体の人心に影響すること容易ならざるものあるべきを以て大に警戒をなすへきも、なほ攻守の計畫については、別に大局に

方面を運らさるものあらん

便ち一所に初めて相會し作戦に到着し此の容本線迄なしめ置きたる大隊兵直ちに関東に乗るべき旨を通じ、兵根に在る所の兵士は其の地を厳守すべき旨を達し小千谷にある所の兵は妙見及び稍峠の険を厳守すべき旨を達し、尚雲峠へは深入りを事とせざる旨を達し、且つ守備の手段を取るへき旨を達し更

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

ん柏崎に急使を出して交代歸休の為め
す囲地まで引揚げ居たる加州勢の出發を
差止めしめたるの外なかりしかうする間に交代と
て宮田まで来り居たる加州兵の至急来着
を促がしめたり

急角する中に福原和勝今町より来りて口
く宇佐は尾州、松代、上田、高田、の四小隊を以
て之を守り居たるに昨夜遅く敵兵不意に此地
に押し寄せたる報あり因て見附より林
三番小隊を出して敵を迎撃し居たる時は已に戰
到着したる時は已に戰
に決戰を為すに及ばず、諸兵散乱して支ふ
ること能はず、三好軍尽く堀潜太郎の両人
は傷を被り熊野通迄は討死を遂げ味方の
金吾となりたり、勢已に敵くのがれなれば
見附も又難守を以て、策を定めて一應引揚

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

くるに於らおれは致方なきを以たゝ
をめ何すべきやと、困て一先つ引揚けて国
家するより把握さを譲り福原は直ちに兵
国に引返したゝ、板垣田使狭手出雲崎より帰
ゝ、山田市之允も共に来小谷島崎へ進撃して戦争を揚
れは昨日小島谷島崎へ進撃して戦争を揚
撓したるも、地形宜しからうわけて途中に出
雲崎に引揚けゝは乙吉口山田口倒の峰に

仁防守を置き、砲台の築造を指揮して帰り
たるとのことなり、依ち福田と協議の上、平
兼傳之助へ書を送り、石地を根拠となし出
雲崎を前営となし、山田、島崎、諸口に斥候を
出し久田に砲台を築き倒の峰へ兵を止め
ることを訓示し一之小隊の兵を分て当
方に繰り戻すべき旨申越たり山田は
昨日丁卯艦にて軟行先と共に新潟に赴き

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

見たるに外國艦は一隻も居らずと知れ
中陸返かく来りの由にて水は陸より数十丈小
銃を発射したりと言へ
信濃川の右岸は已に今
けも又安きと能はず已むを得ず兵を引
陽げ川辺下篠筒場十二浮大黒福井西東
瀬柱沢、表立峠、板尾半蔵金等を分守する
ことゝなりたる川邊より以南古十里越
口、註柳沢沢大白川辺に至る廻近は、狐
十四五里あり、雨かしてぬ
出雲崎の海岸に延長し、右岸の戦線は即ち
敵して也を守るの状あり、恰も越後の國を半
て之の延長七る戦線を守る、地の寒心ぬ
るを海んや援兵の到着を待つこと、大軍雲
霞を望むよりも急なり、而して長州土
州越前、加州よりの出兵は、果して何時を以、

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

て乗着するや否を知らず
り敢えず最も手近のな
但、のぶんと敬
申送りたるも、四日には
救田前に高田より同所
る回條卿に拝謁して越
翰をもち柳川の蒸汽船
て国港に赴き同船に載
も深らるし犬の年

嶌を迎え来たらしめんとしたり、急るに怡
ひ好し加州人二人、文代年のことにつき
て高田より来りたるを以て嶌は之に応接
して、相崎にある所の年を帰休ならしめ
こと、及び高田にある所の年を、定時も速く
関係に探り込むことを要求し之を通じに
年望報、相崎なる湯津祥主地より吸報あり

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

曰く、築前の蒸汽船環瀛丸外の備ふうの弾薬諸器械を搭載して、昨朝今町へ着港し長府の盤石隊五十人程も之の便船にて来着したるを以て、直ちに相携へ小倉に廻艇すべき旨を通達し置けう、今日は尚ほ到着すべきなりと雖々五十人の援兵と雖も此際にありては過日以来頻る甚の欽乏に困しみ、或は如何ともなし難きを以て黄童なる援兵なり、況んや弾薬に於いてをや、此の報道は頻る人意を強くするものありしに拘はらず、未だ其の援兵の到着を聞かざるは如何なる事情の存するにや、若しや途中に於いて或は越前に或は薩州に屯まるのことを聞きたるにあらざるか、若しかゝれば到底前途の望みなきのみならず、久しく現在の戦線を維持することも亦頗る困難なるを以て、保は便ち國元の政府及び永沢等に書を送り

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

戰地の狀況を敘述して
旨緩ふすべからざることを訴えたり
毎日室ねて濶潔なる書簡あり、報じてはく
環瀛凡正に和蔴に到着したりと。
彈藥八 余百発大砲四門、同彈藥千数百発
え必小銃彈藥三万發の
山の如く積み来たれり、
にて未着したる神保沿岸、田栗栗助の語ま

所に寄れば、長州の國論愈々確定し、援兵と
して千城隊四百人、遊撃隊五百人、
小隊由匹大夫同志来二中隊、砲隊と
千百人当國へ出張の御
貴は何時にても出張のま
表に掲ぐられとも奈何
為めに未だ發するこを得ずとて
り依って還瀛凡に相談し水揚げの済み次

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

蒙古荘表へ帰航ニシむること、シたりと、同時に左の世子君の勲直書を轉致しまゐり

山縣伯

幷其外へ

当節其方共、於越後、務晋連戦の趣相聞実以神妙之至に候、其他勝敗は、東の宮軍の威力に致関係之事、別而可遊号節実督府より援兵畳

に付、早速運送中は候、奇隊之儀は、迎船来実様、督府へ申入之、実、吏迄の心得肝要也

十万軍之

伏辰

夏五月廿六日

皇より名古屋迄日、新越後の諸老、即ち新発田の溝口伊織、村上の脇田藤人、村松の笹岡豹太郎、黒川の中郷果一、白石の須

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

永年之忍、連署して、一通の陳営に届ましたる由ちに之を送致し来りたるを見るに、倉津の謝罪状を紹介し又五藩は勿論藤里に組するものにあらざるを陳述し、保証して跡後水(国より深く信用するに足るものにして)笑の悔状を許へて休兵を請ふものにして休兵すと雖も、之に対して返答を與ふるは亦敵状を叙するの一方便なりと思惟したるを以て案は便ち其返書を認めしめたり其概要に曰く

松平肥後殿

天網甚寛不敢歓帰邑以謹慎為名、集浮浪、騒擾隣境、故征伐之令下、越後五藩助其罪不赦、亦天恩洪大、豈有不容帰降乎、況跡後悔水、足顧不忍視、肥後謝罪之状、五藩連署之意、真実無偽則各遣重臣一人受命于出雲崎云

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

而して七日を以て之を送致すると同時に
余は親しく朱雲嶺の指揮者に意圖を示し
遠くの必要を感じ同所に赴きたるが、其翌
日歸り来たれば適ま長岡よりの報には、
昨日は筒場と十二浮と
の間にて、朝夕両度賊の来
襲ありたるも両度とも之を撃ちて破り
たるの今朝は賊あ森之峠へ来襲せり、勝敗
は未だ決せざるも、半藏金最も懸念にはき
至急援兵の派遣を請あらに盤石隊を峯ケ
の一小隊を探りおし、更と、因て即時に加州
て之を長岡に遣わしたり而して別に表之
峠に人を出して其状況を見しめたるに
歸りて報ずる所には、加州飯田の兵戒
めずして、一旦敵の為めに砲台を奪われたる
も奇兵隊と晋山隊とを繰出して激戦し、午時

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

陣に戦を撃退することを得たり
九日には時叛の方面にか、ることあり
因ら同所に住復したる即此方は幸にして
異状なかりしも、筒場、十二浮、の辺は、前日来
常に多少の交戦ありたり、而して十一日に
は又も雲崎方面の敵状照る関心すべきも
のありたるを以て、同所に出向きたるに、其
聖朝に至り、果して久田村、其他三箇所に戦

（参照）
北陸戦記ニハ
前後ノ山ヨリ急撃ス
支ハ能ハス砲台ヲ奪
戦、戦ヲ却テ砲台ヲ復
又ヒトアリ
柄尾ノ戦、森立山頂ヲ襲ヒ
加州飯田ノ兵苦戦、
珠三輩ヲ隊援

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の襲来するあり、直ちに諸兵を繰り出して
應戰せしめしに諸兵は朝
右之時頃に至り、全く之を撃退するを得た
り之の日松代の兵の善く戰いたることは
余の激賞してこむ能はざる所なり
之の日和の落の藤村線手なるものの沢公將
に大山格之助の書を携帯し久保田より潜
かに讃岐船に乗じて由利雲峠に来れり、兵吉

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

に曰く暑に奥羽の各署により一同此事の危急に臨みたるを幸いに久保田藩の来お仙来に與ひまあり、沢公以下九死の中に一生を得て幸いて囚奉藩に落ち行き、隨従の薩長兵とも、今現に囚奉藩欽の野代とある所にあり、為に今や已に弾薬は勿論全く尽き果て、後如何ともすべからざるの窮状に陥入り居れり、速なる官軍の越後に進入し

たるを聞き、来りて危急を報するなりと同て金は取り敢えず金子二千両を募送りて

面前の危急を救ふべきを命じたり、為に十三日の早天に、関

柏崎に駐せて金子の調達を命すると同時に雑にても一人直ちに出雲崎に出張すべき旨を命じたり、為に十三日の早天に、関

の途中にありて、岡千吉郎の早追にて柏崎

県より帰陣を促すの便に接し、急ぎ帰る

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

より、まるに会々り、偖ち沢公の下の危急の
状況を語り、至急に全子を出雲崎に持参し
て讃岐舩に託して也を野代に送致するの
都合を図るべきことを示談し、年岡は定
中より柏崎へ引返したり、後に柏崎よりの
報知によれば、金子は同日直ちに高田より
也を取り寄せて、福田耕作をして出雲崎に
持参せしめ、同時に弾薬をも送りたる由、藤

村権平は出雲崎より直ちに江戸に向ひ、夫
れより京師に赴くの都合なりしなり

十四日には未明より川越の方面に当りて
猛烈なる銃声を聞き、余程の激戦ある様、想
像せられたれば、直ちに斥候を差出し見た
るに、川越にはあらずして川向いなる川辺
なりとのことなるを以て、其の斥候をして
更らに長岡に向わしめ取り敢えず如斯申

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

小隊砲一門を元大島に送し余も自ら大島に赴き見たり然るに之の方面は、元より念すべきものなしと思惟されたるにより、余は川越に至り囚所の兵をひて賊を横撃せんと欲し、誰にても一人元大島に赴き、砲声の最も激しき所に向ふて、叩州兵を引き連れ行くべき旨を関係に言い遣り、轉じて川越に至り見れば、川辺の賊は既に退却し兵を纏め筒場十二浮の方に砲声を聞くのみなりしなり囚って余は関係に帰りたれば、忽ち福原和勝の兵囚より来るあり、曰く、今朝は、川辺、十二浮、筒場、何れも戦ありと、我中筒場は最も激烈なりしの之の激戦を引き起こしたるは全く宮田兵の憤痴なりし為めにして、生和大島の兵隊を守り居たる宮田の半隊一支えもなさずして其の守りを

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

を捨て、長岡附近迄の
甚だ困難となり、薩兵の
及び半隊長を保と矢ふに
小隊毎の把握稜して逐に賊を撃退すること
と得たりと雖も、高田兵に対する長岡の
議論は激烈にして何分の処置をそはする
べからすと、是において種々評議の上、高田
兵の司令前田門之丞に謹慎を申付ること
となりたる迄申し波さしめたり。

前田門之丞

右六月十四日暁長岡に川迫、十二浮、筒
場寺へ賊兵諸所の砲、左右の台場に不
拘、大黒の持場を引退散乱ニ而憤病
の致す所此告高田表へ申波し何分の
事ニ而ハ無之候得共、薩藩の比屋
ら畢竟右不始末

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

御処置有之度旨申越実事

而して同時に左の書付を以て一同に布告せしめたり。

藩に布告せしめたる

別紙の通り申越実条御承知可被成実

奮士気を奮励し持場を固め、仆死戮辱

寝轍を不踏様可御心得旨申越実事

右の前田川之通には絵図数日を経て

右返す十四日、大黒台場戮辱の砲石

未だ所業に付最罰

歎も有之、此の義は格別寛大を

処置を以、捕縛従

他の功績相誅可申候申候事

と言へる申越しを為し

布告せしめたるが、各人は後仰の

討死を遂げたる者に記憶せり

時は柱沢に於ても暗矢より砲戦

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

五ツ時には始る場所
る由会処の大垣ようり報ありたり
里田ヲ以ては先月十四日に小午岩に来り
る後も引続き病気にて今日迄ど会所に留
より静養を為し居
門が里田の代理者として
も云ふべき地位に立
か里田の病気も相平癒したる由にて今日
も長州に立ちて専ら里務
単独に執掌し居たる

始めて小午石ヲ開発に来リ茶ヲ長岡に
赴きたり

十五日柱沢の大堰岳より人を遣リ来りて
は、昨暁は賊兵雨霧紛尾を糸のさるに乗
じて本道糸に山手より来襲し味方死傷
多くして遂に又ふること能わず賊の為め
に山上の砲台を奪われにより、如何にも残念
千万なるのみならず一旦立の口の破ヲ

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

に於いては詰切詰備ち、
川越にある町の団落を
れ、大垣兵の全力を以て
とを許されたしと、其
るを以て便ち川越の兵
こと、し、岩村藩一部川越に出張して其の
守備を検視したり。而して兵を桂沢に派遣せら
り兵団より報あり、桂沢の砲台を恢復し得

たりと云ふ。而も川越の兵を減じた
るを以て、時に其報
じて川手の守備を
厳重にせしめたり

裏に余の柏崎に於いて
を乞ひ之を持して三國落に航行せしめた
越前侯の書翰并に其藩より命を受け兩參謀へ
宛たる書面を携へて、十五日に柏崎に帰
着したる由にて其翌十六日の早天に柏崎

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

より其書面を轉致しまたるを見れば、出
岳の儀に就きては御聊か
意も有之、宜ぬて
室臣を京師へ出して伺の中なるを以て、直
ちに之れに應ずることを得ずとの二とな
り、恐れとも和蘭よりの報知にては右環
瀛丸の去る十三日に、將に三國港を出帆せ
んとするに際して福井より急使あり、出兵
より危急の報知頻々に到るにより、京師へ詞

中とは云いながら坐して官軍の危急を見
るに忍びざるを以て先鋒の兵次至高線よ
り樣との口上を傳へ人數と日限とに就き
ては未定なる由を答へたるに
右の始末なれば迯前の兵は到底頼むに足
らざるを以て環瀛丸をして萩へ回航せし
め長州よりの援兵を迎へまるの寧ろ捷徑

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

なるべきことを思い、柏崎に其吉を云い遣りたる桁柄、長岡より薩兵三小隊東岩瀬まで到着したるを報じ、軍艦を出して之を迎へ入らんことを依頼し、ち陽瀾丸をして之を東岩瀬に廻航せしむることとしたり。

此日西園寺、四條の両公、ひらめたり、両公は戦地実況を視察し、同台して関東に来り、兵を軍隊慰労の為め、去る十四日の夜に、柏崎まで来られ、本日関東へ来り給いしにて、十七日には怪我人の養生所（今日の謂所ゆる野戦病院又は兵站病院なり）を視察せられ十八日には諸藩に慰労の書を賜はり甚文は（本のまゝ）

長岡落城後、連戦無虚日、殊に悍強之賊と對塁連旬不浮遊苦戦候段実不堪感激、因恥一吏卿慰軍労、循速様朝廷へ可及奏聞

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

候也

にして岩村田、松本、高崎、高島への今は遂苦
戦の三字なく、松代への今は別而称誉の回
字多ければなり、益々松代兵の善く戦へる
は前記十二日雲崎方面の戦のみにあら
ず要するに出征軍中薩長に次ぎて最も訓
練せられたる精兵なりしことは疑ふ可か
らざるの事実にして之に対する感謝の書

面の如き慇懃に対するものと称すべきを俟
したるは固より条約の文言にあらざるなり、
面卿は十八日に長岡に到り十九日に柏崎
に帰られたるが、条は帰途へらるゝを送りて
後ち、兵校に赴き帰り来れば、柏崎より報あ
り、今朝築前の蒸汽船大鵬丸奇兵隊二小隊
千餘隊百人を載せて眉港に仆野十郎三浦

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

楫樓善三好古郎善到着したり、而して来着の兵隊は今迄半に相続を出發して当地へ向ふ筈なりと、

新発の奇兵隊と干城隊とは斯くて其翌朝到着

即ち此の朝を以て関東に向ふ筈にしたるが此兵員を載せ来たれる大鵬丸は直様萩へ帰航して更らに援兵を積み来ることに相談ひたるのみならず柳川の環瀛丸も亦

援兵を載せて東岩瀬より帰着次第同じく萩へ回航して援兵を迎へ来るの都合となり居るを以て此後は最早征討の寡少に苦むことなかるべく、従つて防守の勢を一轉して、進取の策を取ることと適当なるべしと思惟し略々作戦の計畫をなして、福田をして長岡に至り、黒田其他と協議を為さしめたるも長岡にては議論

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

未だ一定するに至らず福田は尚他日を期して閑室に帰り茶を楽しみ、此日西園寺公より左の書面を送られたり

暑気難凌候処日々御苦慮案入候、一昨日は初面会戦地情実伸具承り感佩候、陳者今従輔相書輪到来致候に付則入一覧、別紙仔々写と被相合、可然布告願入候仍而右申入度草々不具

六月二十日

公望

廣太

兩参謀

右書中に輔相よりの書翰をあるは即ち宗師寺内伯爵より依嘱に依て乃部卿に帰朝なる者ども公よりの書翰を与へ伴ひ行きたる者なり、寺内伯爵其参謀を伴ひ行きたる者なり

書翰渡ス事

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

なりて筆記せられたる奇兵隊の日記に
拠るも、柏崎になりて筆記せられたる奇
兵隊日記に拠るも亦十六日なりしに
相違なく、当時関原にありたる余の謁見
せざりし由答なきに拘わらず右の如き
は書面に一昨日は初めて書面とあるは筆意
を異にして更に関原になりて筆記せられたる奇兵隊の日記を捉

容を以て布告を作付
副参謀を作付けうみ
杉重源右衛門三人軍監を作付けらみたること
とも報し長州より千人
お上総より五百人拠お
百余人吉州より三百二十州より二百人る
為出兵のことも報しれ
面園寺公の関係に事
おらみたるは関係は

卅一日出雲崎よりの報に曰く、過日来賊近村の浜手へ数箇所の台場を築き機を見て来寇せんとするの模様あるにより、我も亦た之を撃破せんと欲し、丁仰丸と協議の上、一昨十九日曉より丁仰丸は落水村の浜手の台場所在に山田村邊を砲撃し陸軍は浜手と山手と両道より之を合撃したるに、味方は一人の死傷もなかりしも賊の方

は数人の死傷ありしなら
ん。

尚ほ同行柏崎より御看右之仮黒田弓助へ長岡へ報じ遣し呉へ其旨を以て謝すると共に「西園寺四條二卿、岡

には多少の死傷あり、村上勢の指揮後一人を討取りたりと、之の夜十二深、筒場の方向に当り、激烈なる砲声を聞きたるを以て人を川俣と長岡とに出し模様を見届めたるに、例の通り砲台上の撃合にて、別に異りたることとなしとの報告なりしが急の為め三吉吉郎の一小隊を之大島に繰り出し機を見て進むべき旨を命じ置き(下略)

廿二日の暁天に至り、果して長岡より急報あり、曰く昨夜筒場退に関して支戦あり、賊福島に向入し、火を放てり、追撃のに奇兵隊の救援を乞ふて元大島に探りを入れ、更に三河橋楼の隊を之大島に繰り出すこと、の隊は今暁既に戦場に赴きたるを以て、更に三河橋楼の隊を之大島に繰り出すこと如し、余も先ず十郎と共に囚所まで出張したり、迅速に囚所に於いて接手したる所の

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

報導によれば、福島の砲台を守り居る富山兵の敗走したる所へ、千城隊二小隊進戦して賊を邀撃し、之れの砲台を取り返へし一旦賊を追ふて前進に福島も亦隊を出だし援ふて、逐次に又半蔵金より急報あり曰く、今朝六ツ時より開戦、杉代、松本、尾州の持場皆賊の為め破られ、是れらの諸藩兵も西の山に登り賊は東の山に登り双方相対して今尚交戦中なりと、因て之れ迄の隊をして此の方面に向はしめんと欲するも斯くては元大島の方無人となるべきを以て、久保無二を以て、久保無二は先鋒之れの隊を吉方に引戻すことゝなし、余は薄暮前関原へ帰りたり旧来着し居たるなり

山縣公史實調査會用紙

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

又相当に急報して呉畏君次第迄ちに書方へ繰り込むべき様取計い方を命じ遣りたるに、其翌日使の者帰り報する所によれは、環瀛先は昨迄薩兵三百人を積み載せて、相崎へ帰着し、此薩兵は、本日長岡へ繰り込む運ひとなり居る由にて人意を強くしたりと

然れとも敵の情勢は、尚文記しまたるの如く

にして、官軍の勢力は増加することなく特に其主力たる薩兵の如きは、昨日長岡に至りては退日小隊の乗り加りたるとて本日薩の三百人の乗り加わりたる丈にて到底迚も其数に満たの功を奏するの望なく、加ふるに余の観察する所にては薩は専ら東国に力を用い従つて跡後の方は自然手薄になりて専ら力を用

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

みる能はざるの状況あり、因つて余は更らに進むに先ち長州の兵を招致せざる能はざるを感じ、東岩瀬より帰りたる還漉丸をして再々萩に回航せしめ更らに又当時函館に在る所の長州の汽船華陽丸を招致し之をして兵隊及び輜重の運輸に任ぜしめんと欲し、兵の上を柏崎に云い送りて、兵卿合を取計らいむることといたし、華陽丸を招

山縣公史實調査會用紙

致することは佐野十郎の国許を出発するに際して、藩の政府より厚く指揮を以てなり

此日半蔵金より昨日の支戦につきて詳報あり、曰く朝古ノ時頃、賊軍東の山の手と北山の中腹とより砲撃を開始したるにより、兵を繰り出したるに彼軍の押寄せ来るあり尾より亦優勢なる賊軍の

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

り、從てこ方に敵を受け戰鬪る困難をし
も松本隊と十當小隊とは東山に上り、尾州
隊は北山に上り、双方共に夜明け頃に戰を
擊退したり、然るに松代と尾州との持場
も、始より敵の攻擊を受けて、戰中、松代の台
場は甚の前面の山上に敵の上りたる爲め
に取り圍まれて苦戰苦鬪、而中の又ま
ん丸として山手に迫み
たるに、却つて戰の
爲めに取り圍まれて苦戰苦鬪、而中の又ま
で迫んで戰を追い轉して泰上邊まで出
で、松代、尾州も亦迫擊して戰を中村邊まで
擊退したるは午後七ツ半時なりしと
茲に奇兵隊の日記によりて長岡方面に於
ける同日此の兵の配置をおもむけし

川邊　蘆田當一小隊　上田一小隊
黒津　吉田一小隊

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

下条　加州一小隊
福島　富山一小隊　一砲門
十二浜　長一小隊　盤石隊共　加州一小
池端波口　薩十番隊一小隊　田ノ口一
向陽　小隊　隊　二砲門
笥場　薩一小隊　二砲門　加州一分隊
但砲

大黒　薩十番半小隊　高田一小隊
乙吉　高田一小隊　土田一小隊
浦瀬　高田半小隊
桂沢　大堰三小隊　杭代一小隊二砲門
葦長　長四番一小隊　二砲門
桂沢　杭代一小隊
森主峠　長三番一小隊　加州一小隊一
今隊　飯田一小隊　二砲門

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

間道　高田半小隊
柳村　庄州半小隊
半藏金　長十番一小隊
松本一小隊
庄州一小隊加州
一小隊二砲門
左翼右
松本二小隊
高崎一小隊二
但砲
高島一小隊二砲門
加
尾一小隊
庄州一小隊
尾州一小隊

此四方の敵には兵極と申雲崎と中間と思わる、邊りに主りて烈敷砲声の主りたるを以て、或は賊徒の連名へ閧入せるとも知れずやと思ひしも一面には斥候を出し、一面には援兵探り出しの手筈を整え兵たるに斥候の歸り報する所によれば、兵極迅に此方へとのことなりしにより更に人を出雲崎に出し、余は庄野十郎と共に

其報ずべき出張したり

然るに同所に接手したる伊藤傳之助の飛報によれば、昨曉天より賊の来襲に会い頗る苦戦にて未だ退却なすに至らざるとも諸口にては已に加州の隊長水野徳之助も討死したりとの事にて形勢頗る開心すべきものあるも以て油断ならず一小隊を應援として

其報ずべき出張したり

然るに同所に接手したる伊藤傳之助の飛報によれば、昨曉天より賊の来襲に会い頗る苦戦にて未だ退却なすに至らざるとも諸口にては已に加州の隊長水野徳之助も討死したりとの事にて形勢頗る開心すべきものあるも以て油断ならず一小隊を應援として

其報ずべき出張したり

然るに同所へ報じて吉田の隊を脇野へ出し同所へ来着すべき旨通知ありたるに、昨日以来は別に敵兵の大挙して来襲すべき模様もなく、防禦の手筈も大略整いたるを以て、一泊の後ち其報ずべき出張を経て関原に帰りたり

左に掲ぐる公史の書翰は其の前日に関原

其報ずべき出張したり

然るに同所へ報じて吉田の隊を脇野へ出し同所へ来着すべき旨通知ありたるに、昨日以来は別に敵兵の大挙して来襲すべき模様もなく、防禦の手筈も大略整いたるを以て、一泊の後ち其報ずべき出張を経て関原に帰りたり

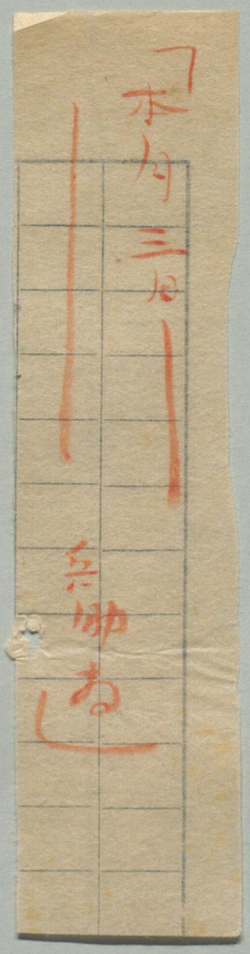
左に掲ぐる公史の書翰は其の前日に関原

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

達し候たるもの

本月二日五日両度之御翰相達候処、
災熱之候弥以御忠壮被成、御滞陣、御隊
中一統強壮御勉励之段欽慕此事に候
存実、先頃長岡城御乗取以来僅一両日
御休息にて五日頃迄連日御苦戦之段
承知仕、実に北越一万有余之大兵中少
勝を期し、無隊鞠躬尽力は何地も寵

長二箱之兵而已に有之去月十一日長
岡城御攻撃之次第引続き御苦戦之程
は奉
遠察候に付、
本文三句
不顧死生勉励
る処先生初諸君之尽力に有之と相
存実偏
奉侍候北越智略等
御国の兵隊御備
之
孝乍此上弥以御気張御攻撃御成功
但の折柄、尤当地同様
山縣公史實調査會用紙
御快被



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

達し候たるもの

本月二日二日両度之御勅諚
恐懼之候旨、御忠壮
中一統強壮御勉励
之段欽慕此事に
存実之候長岡城御
御休兵にて五日頃迄連日御苦戦之段
承知仕、実に北越一
万有余之大兵中少
勝を期し、無隊尽
勅尽力は何地も
同城御攻撃次第之
は奉遠察誠に魂気
不顧死生勉励之段
る処先生初諸士官之
尽力に有之と相
奉侍候北越暮
但の折柄、
表下此上
長二篇之兵而已に
有之去月十一日長

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

仰出御諮相成実ニ
奉力を尽し、東北其寒気に不慣
候定相成不申ては
不能満足、就ては
十師其外平城隊四
半座、其師隊之達而
合六百人余ニ去月廿九日比ニ於萩港
鎮前蒸汽艇ニ乗組
御合ニ相決実ニ
達而御御意置実ニ
は多分五日御投
に此日筑藩より
成ん、少しは御援
日疲労之御手当も
案実ニ一日千秋之
と有無確報相俟而
就ては東北二道
一つにて漸々相

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

近み名松坤城に迫るに臨む、多分御籠城相戦ふ可有之には候へ共、敵軍移営無疎詮謀相成ん、已に薩兵増出張にも相成ん歟、是又不遠着陣可致之和寺宮御出陣被仰出、一両日中には当地御着出之、御竹忠相成ん、其外岩国にも同時、肥、土、越等へも同時追々多人数可相成弥、更和仁

地御着馬の御砌、御合方の御砲被恩召候分被為相動、追に御成功奉万祈候いつれ出張は東北共に分籠兵着向、薩兵も追々御着馬、一応御帰国中には未成功を期し実事に御座候、依而関東も御国兵御供之第一、二、大隊合に被為在、何も御勝を期し実事に御

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

座候稲垂穂之儀は別紙を以御高覧
不異恐惶謹言
六月十六日
二陳不能中、天時御
自愛、孔傷は勿論、笑罵中平病人ゟ多分有
之候失敗皆初陣中へ宜敷御致意奉
願候可祝
仁助大兄
兵助拘

別封、丁卯九へ御届可被下候、事
膝下

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

も後ら相去よりなる一(此の一節は首頭の処へ細字にて傍書しあるもの)なれども淳窩の都合にて(ママ)ること、したり

同時に木戸よりも来書ありたれとも手許に在らず

曩に岩倉公より西園寺卿への内報と云い、今又広沢よりの来書と云い、共に接待の際

結として当地へ来るべきを報導すれとも、虽も、九月廿九日頃に至りて当地へ到着したるに付過ぎず、運送船の不足なる、実に輒歎に堪へざるものあり、仁和寺宮の大兵を率いて来陣し給ふも、恐らく来月の中旬頃とならん乎、衆師における兵糧の苦心と、合力とは、固より感謝に忽へおれとも寒兵を領して戦場にあるの

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

山縣公史編纂調査用紙

さに於いては、援兵の来るを待つ、真に一日千秋の感あるを免れざりしなり

然るに幸望外七日、相崎より急信あり、昨日黄昏、濃霧濛々の中城隊と中隊を搭載して扇港に着せるを報じ来たれり、而して此の天候を利用し、依世八十城隊は外七日の晩景に相崎を出発にて、翌朝関泉に来着したるの二小隊を取り敢えず長岡城に繰り込み、一小隊は栃尾の戦線を増援せんとするの議あり、当日はよりえき、長岡城にて休憩も適宜簡場、十二深等を実行せんとしたるも之れを以て直ちに

はず前泉彦太郎と云い指揮官も共に来陣したり、依つて左の二小隊を取り敢えず長岡城に繰り込ましめ、一小隊は栃尾の戦線を増援せんとするの議あり、当日はよりえき、長岡城にては休憩も適宜簡場、十二深等を実行せんとしたるも之れを以て直ちに

即ち前泉一誠なる戦地にては依世と言

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

後も防戦に急にして、未
あらざりしが今や薩長の
はり、加ふるに林八郎に
も其本國より出地に繰り
勢力又た週間以前の比
較ならず強勢を擧げて攻
九日福田をして長岡に
に向かて一撃を試んと欲し、林
に至り進撃の策を協

議せしめたるに、黒田其他も別に異議あ
ことなく、福田は愈よ明朝を以て進撃す
の決議を齎らし帰り来れり
此日吉井幸輔来着ありて吉井は先般御貰入
になりたる軍艦摂津に乗りて、昨は柏崎に
到着したるが同艦にて御親兵の内十津川
兵二中隊を連れ来り、右兵は今又妙法寺に
宿し、明朝出地へ繰りむべき都合なりと

山縣公史資調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

言へり。伝て右兵は軍会
に繰り込ましむる事
なし置き、軍は福と共に長岡
日に関原に赴きたり。朔日
の攻撃に付ては奇兵隊の報告書に
て概要をたに抄出す。

七月朔日、栃尾の賊を一掃せんとして
議し、義之峠より林
譟し、薗小隊、薩州、加州

千城各一小隊進撃一の貝の賊と戦い
底ろりに至り、砲台四五箇所を奪ふ。
林之薗小隊、右手の大手山に登る。賊(荷)
此に主る林兵追ふて橡尾(ママ)より十余町
前まで進み又戦ふ。地形悪きを以て、一
の貝比礼両口へ引揚ぐ。林、栃窪峠より、
四番小隊、薩州、松代千城各一小隊進撃
橋沢の間道を通取
り賊と戦ふ。林兵賊

山縣公史讀調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の砲台後の山に登る賊遂に主る生擒
一人僵屍七八あり半藏金よりは外ナ
二畳ㇵ隊、松代、報國各一小隊直撃、而中
の又にて戰半日許り、賊を破り、田の
口より荷比におひて賊と対壘す。翁陽ナ
ス。
三浮の岳ナ栃尾口に策應直撃セんと
二日夜未だ明ケざるに賊より大黒の

砲台を急襲すれ賊、富田、討岡の兵激戰
五を退却
く賊の屍三十余
二日の朝大黒における富田兵の奮戰は余
の感歎に堪へおりし所にして、兵場外に
突出し、抜刀にて賊陣に切り込みたるㇵ如
き去る十四日に一文えもなさずして砲台
を捨て去りたる兵隊とは全く別物の如く
思われたり。蒼し兄ㇵの厚を洗雪せんと

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

とするの念は、殺れらをして勤くの如く勇敢ならしめたるならん。たるもの実に世余人のそれに多きに及びしなり。

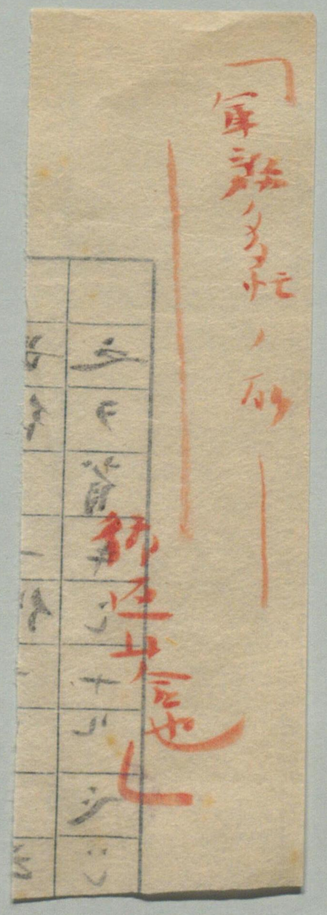
此の日西園寺卿より左の書翰に接したり。是より先き、西園寺、高倉両卿より、柏崎へ御転陣相成度由にて御桑ねの趣きあり、御任意を奉答し置きたるに、卿は昨二日を以て金沢を発して柏崎へ転陣と

山縣公史實調査會用紙

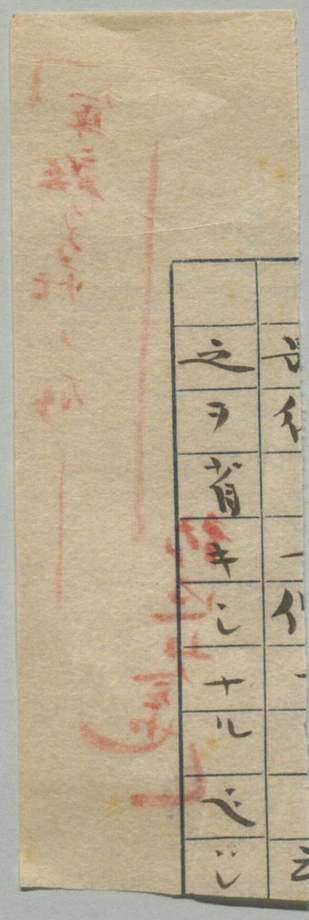
られたる事。

軍務多忙之所、御安康珍重存奉、然者過日承諾候、関東監察之儀、仕候而、別紙之通、教諭仕候、尤勤方総而、別紙之通、仕申仕候、尤勤方総而、別紙之通、仕申仕候、尤勤方総而、

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

とするの念は、殺れらをして斯くの如く勇敢ならしめたるならん。たるもの実に世余人のそれと多きに及びしなり。

此の日西園寺卿より左の書翰に接したり。

是より先き、西園寺、高倉両卿より、柏崎へ御轉陣相成度由にて御桑ねの薙さあり、御任意になさしめ給ふ旨を奉答し置きたるに、卿は昨二日をもって今に柏崎へ轉陣と

られたる事。

軍務多忙之所、御安康珍重存奉、然者過日岩村籍一郎に仕投書の旨意一令承諾候、委節委曲申達奉通、関東監察より達奉通、関東監察之條左大將より教諭も有之、旁次今般改正、会望附属軍曹に申仕候、尤勤方総而是迄之通可相心得、是亦相達置候、且又他に軍曹一人差遣奉条、箱一郎同様可

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

為指揮願入実仍而右態と如此候也
七月二日　公望
山縣狂輔殿

二白　追日申入実連ら則昨二日柏崎迄
轉陣致実、此條申入実、猶不日其表迄進
軍之心得に有之実因都合次第可被申
聞取願存実也

之白　望　隨従之軍曹名前
藤一郎同伴　中川秀之助
差出候　　淵川忠之助
任序申置候　　飯田種彦
四白、只今関東より飛輪致来、別紙之通
申来実是は追日参謀より教諭には直
に東山道へ攻撃に相成可申哉へ言上

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

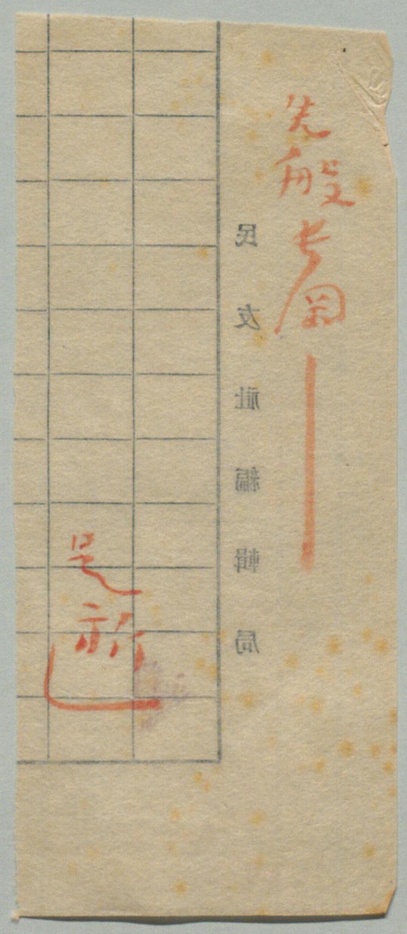
敬実御返答迄

右書中に所謂関東より
にして大村益次郎の内
のもの

先般会津征討後、賊兵
苦戦の報奉聞、就ては
と候段仰越実御尤も
迄之儀は前田八州の賊
御同様官軍ゟには東奥迄軍を
所、先般上野山内掃攘之後は更に奥内八
州に顧眄之患無之に付、速々東奥に手を
降し、先般之功を
海道より岩城手、相馬
をもって官軍千人即
平に千人出兵、依而不日更に仙台に攻撃
手配有之候間、各仙台へ直程面

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

致奏御返答四

右書中に所謂閣東より
にして大村益次郎の向筆にて認めたるも
のなり

一 先般会津城後、賊兵
苦戦の報奉案ずる、就い
ては東奥早々進軍
を促被仰越実御尤も
の事に存ずる、実に昼
夜之儀は存ぜ八州の賊輩逃ゝに乗
御国標官軍ゟには東奥進軍ゟ未奏ず
所、先般上野山内掃攘之後は更に存内八
州に顧盼之患無之に付、追々東奥に手を
降し已に来四日白川に進撃、棚倉に向い
海邊ゟは去ゟ十七日ゟ岩城手、相馬
を指して、官軍千人、明廿八日に更に岩城
平に千人出兵依而不日更に仙台に攻撃
手配有之候何分江戸ゟより仙台へ道程百

山縣公史實調査諭用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

甚概要を記さんに、初め十四日十里海路二百里余、進軍の時日萬延、就いては甚御地へ敵兵輜輸毎々御苦慮之段、傳聞不致之意之実況、蒸汽船極而払底苦慮此事に候。然るに七月中には仙台より庄内迄拔職兵隊之地形、弥平配に候間、此の上御横戦畳新

岩村藩一部の退退に就きては、当時余の苦心したることゝ少なからざりしを以て、茲に林人にて木呂る善兵衛と云ふ者北越軍艦監の命を領して江戸より、館ては岩村は甚軍邊を羅直ちに引退すべき旨なし、甚の情実にも しく信州諸藩の指図を 迂ど后れる岩村の引退して、何のやうも なき新来の人の之に付るに於いては甚不

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

保なること云ふ可からざるものあるを以て家は岩村を越後に留め、信州諸藩の騒動を命せらるゝ様、高田表なる警衛へ申上したるに、之と同時に岩倉卿よりも、岩村を召し返さるゝの使あり、其の使の言ふ所にては何の御不審の廉もあるとのことなりしかは岩村は即時に帰途に就くべしと云ひ張り置には小千谷にて貴君の此責を

蒙り今は又岩倉卿より不審ありと云ふは何の面目ありて、此の地へ留るを得んやと云ふ、其の心情既る気の毒なるものあり、依つて家は岩村の越後進入次第ありて家なき事と、及び今日突然岩村を召還せらるゝに於ては信州諸藩の安或は統一を欠くに至るの虞れなきにあらざることを縷述したる書面を認めて也を岩倉卿の

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

便者に返し岩村に怨論して戦地に留まらしめたり、享て岩倉卿より関八州と奥羽と
は江戸より指揮し、迯後表は朝廷より直接
に御指揮あらせらるゝこと、なりたる今
日、岩村の依怙として東海道軍監の名目を
有するは穏かならざるをもて、宜しく名
目を改むべしとの旨を申し来り、西園寺卿
よりは和宮様御着迄依怙軍監とし

山縣公史實調査會用紙

て差し措くとの回答あり、今回改めて軍曹
とせられたるにて去る廿七日に京田に赴
きたる岩村は、此日淵川等と同道して関原
より帰り来れり、是にて余も大に安心する
ことを得たりとなり

六日には加州兵二小隊到着したるをもて
其の内一小隊は十二日に二小隊は十三日に
に繰り出し其の備の手に応接せしめたり

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

七日に至り宮様附属の軍曹芳野昇太郎来陣宮には去月廿八日に京を発ち摂津艦差廻しの迎艦を御待ちに付そふとのことなりしかば、折節雲崎へ出張中なりし吉井を呼び迎へて相談の上摂津艦を敦賀へ廻し、宮には陸行の諮詢を遂げたり此日東岩瀬に出で同所より加州の軍艦にて高田へ来るべきことに協議

山縣公史實調査會用紙

高倉殿より総督御免に就き近日帰京の旨特使を以て申し越(達)されたり

西園寺卿は八日を以て金沢より関原へ轉陣せられたるが是までは戦線非常に延長し兵站線も甚だ遠くなりて味方の兵力は甚だ寡少なりしにより、関原の本営のみにては全軍を指揮するに不便なる事情あり従て長岡にも甚だ本営を設くるの必要ありしと雖も

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の長岡と関係とに命の
にては前にも屢記載した
不都合多きのみならず
加わり、遠からず新深を
に至るべき今に最早や関係に根拠を置く
べきの要もなきをもって余は此際長岡へ陣
を進めらるゝを可とし候卿は九日に直ちに
長岡に轉陣せられたるをもって余は福田を
して、長岡に至らしめ、会議所を同所に移す
ことについて協議せしめたり
右に就きては長岡にお
なかりしをもって便宜之
て急ぎ会議所を長岡に
光布告して諸藩にも各本陣を長岡に構へ
しむることゝしたり、而
園寺卿の宿陣をもって之に充つることゝし

山縣公爵家編纂館用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

吉井、黒田、前原、及び余の四人の白々こゝに
落詰め合わすこと、なり、余も十二時に長
岡へ移りたり
前原の参謀に任ぜられたるは何時頃のこ
となりしや、奇兵隊の日記には勿論太政官
日誌及び北征日誌等にも総べて出を記し
あらずと雖も前原の参謀として戦地にあ
りたるは事実にして余の記憶違にあらざ
るを確信す
前原は又、当初は痒く薩人を嫌い或る時の
如きは黒田と感情の衝突よりして、参謀を
辞して帰国せんと迄言い張たり程なるも
頓て大いに吉井と親密になり、後ちには
同志たる所なるの如き吉井は深く前原
を称揚し次て長州人中卓に見るの人物と
なし前原も又吉井の人となりを称揚もす

山縣公史實調査會用紙
山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

と云ふ

仁和寺宮が論旨として出征ならルニと、なりしの外、西園寺卿は前にも記しにる通り宮の参謀となられたるを以て其の職務上に関する言へば別に我と異ることなきを以て訳合なれども、是まで久しく我との論旨にうち人なる上に関する人なれば其後も依然前鋒の総督として

山縣公史實調査會用紙

立を待遇しなるなり、抑も当時の兵るや決して徴兵制度施行後の兵の如きものにあらず朝廷に面従するものとては御親兵と称する極く少数の鴻募徴兵によなり其他は悉く朝廷の命を奉じて諸藩北越へ出征せしものにて是等兵士の手当は勿論、禅薬糧食に至るまで皆朝廷より給べて其の藩に於ても負擔し朝廷よりは参謀

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

若くは軍監の如き朝廷の
れたる武官に手当を支給
す従つて各藩皆吏々の
一して一定とる指揮命令の下に動かし
るかれ、今日より也を想像すれは弘んと
得て望む可からざる二と
は勤王討幕の事先者たる
力他の諸藩に比して多数にして且つ練

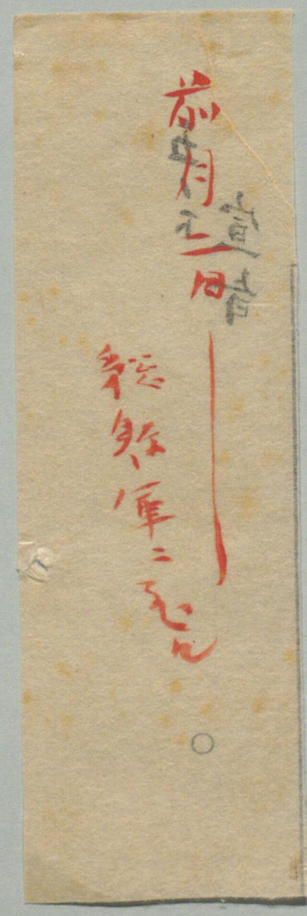
熟なりしを以て自ら他藩の兵隊を指揮す
るの力あり作戦計画は常に藩庁の会議
所において決定とられ諸藩は常に藩庁の会議
の時には

前角二日晴
総勢軍二て
通ル

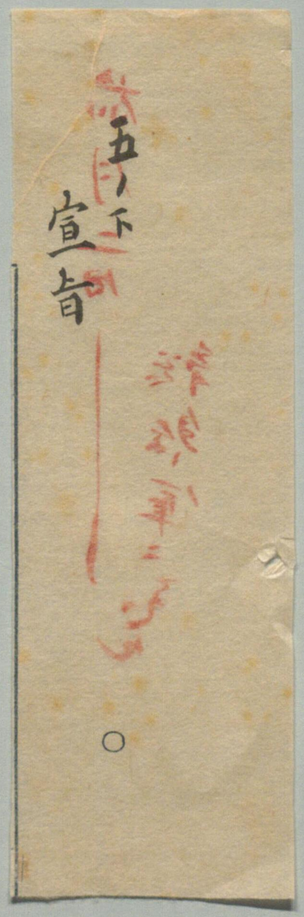
況なり

然れとも、此の際と長と
云れるに於ら不機に臨み事に臨み

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

若くは軍監の如き朝廷
れたる武官に手当を支給
す従つて各藩皆吏々の
一して一定せる指揮命令の
るかれ、今日より也を想像
得て望む可からざること
は勤王討幕の卓見者たるのみならず
力ある作戦計画は常に藩
の諸藩に比して多数にして且つ練

熟なりしを以て固より他藩の
るの力あり作戦計画は常に藩
所にありて決定せられ総督
の時には勿論仁和寺の
と会議所の報告を受く
況なり

然れとも、此の際と長と
長れるに於ら不機に觸

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

意見と感情との衝突を免のれざりしことは上来の記事を見ても也を察するに余りあるべし、殊に黒田に対するは実に非常にして弦んとするものあり、余のなきも亦真迷に前条の如く職務を抛ちて帰国せんとまでは考へざりしも何かも参謀を辞して奇兵隊の一人として行動するの、一身に愉決なるは勿論、結極朝廷の為めにも、忠義となるべきを思惟し断然辞表を提出したることとありしなり、而して余の辞表は一旦聽届けにるも幸て総督宮より懇諭あり、遂に又留職することゝなり、奇兵隊の日記七月十六日の条に余の参謀を免ぜらるゝ旨京都より御沙汰あり、迅速に達し来れりと

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の記事あり、十七日条に、余の相馬の本営に出頭したることを記したり。誌の七月十七日の条に、御帰京以来、不容易尽力、殊に薩長以下山縣在今日に至るまで

宮もこに高田に着セられ柳川同州其他の
兵士は四人御供にて両三日中に相継に着
セらるべき報知あり。四日人は前日前にこに着し、明日頃は長岡
へ繰り込むべき筈にて其他にも尚援兵
の来りつゝあるべき見込あり、且つ海軍の力
も漸く増加したるを以て、今はこゝに始めて兵を進めて敵の根拠を衝くの機会に到
達したるを感じ海路より兵をおして新潟
の根拠地を攻撃し同時に陸路よりの前進
を開始して、腰背より敵の狭撃するの運策
をとて、吉井、黒田、前原等と種々論議の末遂
に之を一決したり

折柄参謀樺田十左衛門新発田同人寺田某相
馬某の両人を同道して到着したるが右両
人の言ふ所に拠れば新発田は賊徒の為

山縣公爵實記編纂用紙

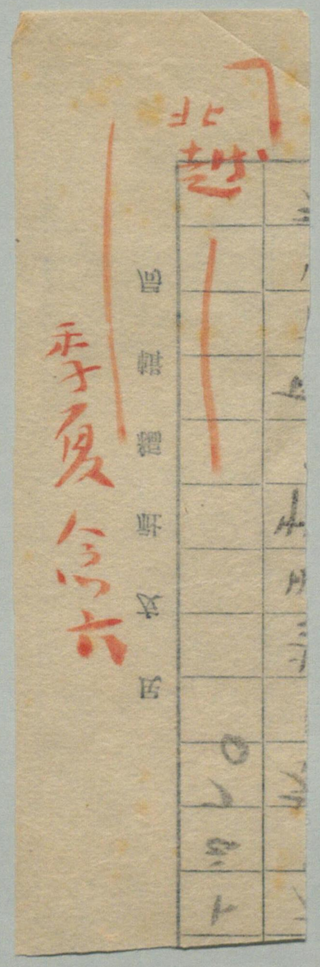
山縣公爵實記編纂用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

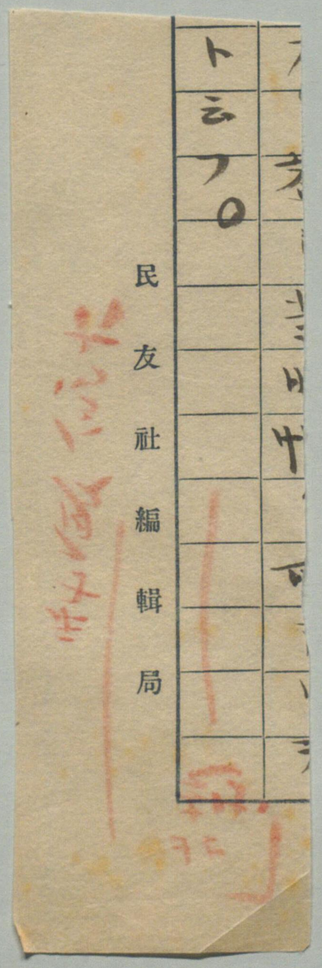
に迫れて已むを得ず少の兵をもしたゝ
と雖も、固より王師に抗
らむれは両人帰郷の上
師を迎ふること、したゝ
して專言に詐りなけれ
すべき軍隊は一層便利
て吉井は同日即ち十三日に柏崎に赴き同
所にたゝして海軍と打ち合わせをなすこと
に決せり
此日我が藩候より、奇兵報国両隊への慰問
使として、来
師より来
北越探
に長岡城を乗取候、依
故助として諸兵出陣中は候条一和協力
して可抽忠戦者也

山縣公史實調査會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物



国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

に迫れてこむを潔す多少の兵をもしたり
と雖も、固より王師に抗するの意あるにあ
らざれば両人帰郷の上、
師を迎ふること、したがひて專言に訴うなけれ
すべき軍隊は一層便利を得る訳なり依
て吉井は同日即ち十三日に柏崎に赴き同
所にありて海軍と打ち合わせをなすこと
に決せり。

此日我の藩候より、奇兵報国両隊への慰問
使として、森藩蔵来嘉竜之進と同人より京
師より来陣したの御直書を交附したり

北越援兵為出張被仰付候処、屢遂苦戦終
に長岡城を乗取候、依感歎之至に堪へ
故助として諸兵出陣中は候条一和協力
して可抽忠勤者也

山縣公史實調查會用紙

山縣公實記調查會用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

は隊中死傷も不少不慨之事に候処
眞是迹実には稽々
薩養相加可申実事
代辰

十五日には仁和寺宮愈
つき西園寺卿は御迎え
七ら被れたる旨、吉井は相楪まで書翰を送り
山田と打合せの上、海路直接の上諸兵を
来る十七日までに相楪に集合することに
評決したる旨を報じ来れり、依って余は前
原、奇兵隊の中よりは、隈に兵
数にある所の分、即ち奇兵報國各一小隊及
び干城隊二小隊を其方へ向けることとい
し十六日に迹前兵六小隊と、史を交代ー
振武隊全部長岡に到着々

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

余は前に記したる通り、十七日に柏崎に至り十九日まで同所に滞在して廿日の早天に吉井等と同道長岡へ帰りたるが、余の滞在中は連日来の風波にて柏崎へ帰ることも能はざりし諸軍艦も廿一日と廿一日とに悉く入港したるにて海路進發の諸兵は俟ちかねの手拓を以て、朝廷の摂津艦、筑前の大鵬艦、梅川の千別艦、長州の丁仰艦、四州の錦懐艦、藝州の万年艦、次に六艘に乗り込み新潟松ヶ崎を指して前進することゝなりたるを以て陸路の方も愈よ廿三日の暁天より

進軍着手と決したり、而して海路進發の薩兵六百人は大要左の如くなり

薩兵百人　長兵百人
藝兵二百三十人
大砲二門（長州大砲隊）

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料（写本）12

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

五ノ下
諭旨ノ二
○

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12
挟み込み物

（長州大砲二門）

薩兵百人　長兵百人　藝兵二百三十人

しなり

海路進發の事の命は大要左の如くなり

たるを以て陸路の方も急よ廿三日の曉

み新涯松ケ崎を指して前進することゝなり

大坂迄軍を出すことに決しなり、而して

の錦懐艦藝州の万年艦、次に六艦に乗り込

家は前に記したる通り、十七日に柏崎に至り十九日まで同所に滞在して廿日の早天に吉井等と同道長岡へ帰りたるが余の滞在中は連日来の風波にて柏崎へ帰ることも能はさりし諸軍艦も廿一日と廿二日とに悉く入港したるにて海路進發の諸兵は俄のの大鵬艦、榊川の千別艦、長州の丁仰艦、四州、

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料（写本）12

は當見名大夫西村の
面ちに新發田に進み
薩兵百人　長兵百人
大砲二門（薩州大砲隊）
は松ケ崎に上陸して前進すべし
徴兵百八十五人　秋月兵九十人
は須見に上陸して同所に滯陣を爲し援
兵の來る方面に向かて、急に進發す

べし
栃木兵三十人
は兵籍整出し等に任すべしも臨機に
應じて援兵たるべし
黒田は之の隊　藩職歸國を申出でたりと
のことなりしも矢張海軍と共に新潟に
方へ向ひし樣に記憶し居れども是より後ち
は戰地において、總て黒田と會見したるこ

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料（写本）12

となりしなり

陸路よりの進撃については余は曩に先き前進軍を薩を主力とせる部隊と長を主わとせる部隊とに分ちねん方を異にして進まんことを提議したるも、之は薩長を別にして不愉快なる衝突を避けんとの念のみに出らず、過去六十日間の経験によるに薩長次外の諸藩の兵は多く練習の為に

すして君子の薩長をしてを伴はしむるに出されは十分に其任務を尽さるの状あり、従つて両藩の練兵は、常に幾多の令隊となしてを諸処に配置せるかごとらす日日東西に馳駆する、其労は甚だ多くして、而かも其校倆を尽すことを能わざるの憾みあるを以て今週の退撃に際しては薩長兵に其藩兵を一團体となし、山道平地共

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

に服所の勢を以て猛進を為し、一挙にして新宮を陥落するの目的なりき

右につきては、吉井等に於いても、毫も異議なく、直ちに之を一決したるを以て、余は即ち薩をして其の取るへき途を選択せしめたるに、薩は手地即ち長岡口を撰ひたるを以て余は即ち栃尾口を取ることゝ

したるも、其極口及び出雲口は之を厳守するの計画にて諸藩をして其守備に任せしめたり

是において薩長両藩は其の引受け方面以外に令配し来たる兵を夫々長岡栃尾とに集中することゝなり薩は井田口の迂まてに之を長岡に引揚け、長は井之口日の迂まに之を栃尾へ引揚くるの手段を取り

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

たり、是れ
より薩州全部に
平地の奇は廿五日曉天
長州全部に諸藩奇を加へたる
廿六日曉天より攻撃を開始し
以てなり

右の次第にて、廿四日の
にありたる奇隊は皆前進を
奇のみならず引揚け来りたる

滋野三吉の二隊と長
居たるのみなりしなり
余事も廿五日の曉天に
するに就きては、追日来軍状
に逗留し居たる熊岡使
京都を指して帰り去る
て、廿四日の夜には奇奇隊の本陣にて、之か
為めに別杯を酌み交し
雑談に夜を更か

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

たるの余は独り諸子に先だちて寝に就きたり

為に朱だ幾もあらざるに福田等は余の枕頭に来りて呼び醒し、方向にあたりて大の手の揚がれるは、恐らく進撃の攻撃を開始したるなるべし、我々も最早や未夢すべき刻限ならん手と、困って時計を換すれば一時を過ぐること未だ

多からざるのみならず大の手揚がれると云ふ如き頗る不審に堪へざるものあるを以て余は蹶起して諸子を警戒し、急に斥候萩原に命じて騎馬にて出でい模様を見せしむれば豈に図らんや、敵は已に城下の町はずれに押寄せ居れりと云ふ、為に驚愕も前にも書へる如く城下には僅少の兵あるを

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

の外、其僅少の兵中多くは其の日に長岡に来りたるのみにて固より地理に昧かるに土人は総べて敵兵に味方するものと見做すべかりき形勢の不可なる、実に言語に絶えたりと云ふべし、因て余は諮詢に応じ、直ちに市街戦を冒すことなく最寄り敵兵の痕跡の方向へ退却すべき旨を傳令し直ちに西園寺卿の宿陣に至りて其所に参詰たる長三州に軍の次第を語り、彼をは長岡城外に出で兵を集中して恢復を謀らさるへからさるにより、兎か妙見の要衝を守備する決心なり、足下は此旨を西園寺卿に告げ錦旗と卿とを守護して速かに関原に退却すべしと命じ、余は前原の宿舎に至れは前原は屋根に登りて大の字を望見し、就、就を連呼し振たり

山縣公史實調査會用紙

山縣公實記編纂用紙

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

蓋し前原も亦此の失を見て官軍の今所は近を次撃するものと思い余は事の極めて急なるを報じ且つ人数を纏めて一同に退却を為すの必要なるを語り尚に従ふて妙見の方に引揚げたり蓋し長岡を取り返すには是非とも妙見の形勢を占め置かざるべからず然からざれば敵の為めに重ねて模峠の険を距せられ、五月十九日前と同様なる困難に陥るべきをおて

なり

其中に賊は早や城下の市街に入り込みはて四方八方に火を放てる失ひたるや将た途を絶たれたるや一向に引揚げ来らざるを次て余は憂慮に堪へずお花の峰さに明けんとする頃三吉右京助の一隊をして城下の裏手にまわり俱楽砲撃

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

を試みしめたるに此隊も亦同じく行衛不明となりたる後に聞けばは之吉の隊は交戦中退を失ふて遂に帰り来ることを得ず奮激戦奮闘の末大島より一里許りの上流を渡りて関原の方に退却し滋野の隊は猛火の為めに退を絶たれ加州一小隊松代十許人と共に信濃川堤にて激戦をなし賊の為めに囲撃せられて、中島なる敵の空砦中に入り込みて終日敵と砲火を交えたる後夜に這入りて初めて船を得れ亦大島の方え退却したりと云ふ同夜の混雑は実に非常にして、大島口の方に引揚中たる病兵夫等の中には渡り尽ふて溺死したる者さえもありし由、余は斯る変事のあらんことを慮り、大島の渡船場へ行く路と妙見街道の分岐点にありて軍隊の

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

指揮をなし渡場え行く者を
れども、而かも此不幸あるを免かれ得ず
しは先きに疾く大島へ向いまりし者多
かりしの為めなり
其の由に依もに明け味方には差したる
損害もなかりしと明白となりたり、余は好
見の方向長岡を距る一里許の郷中の寺に
て僧に命じて、朝餉の仕度をなさしめたら
ん折柄、敵は此方の手薄なるを知りてか
街地の事なれば容易を以てして地理に精
通する敵と相戦ふことは大に利益なる
ようこむを得ずして退却を為したりと雖
も今朝隊伍を整へて一戦を試むるに於い
ては敵を撃退すること、或は大に困難な
らんも知る可からず因て福原に立の意を

仙窟に以為らく敵は必ずしも大軍にあらざるべし昨夜は不意のことゝ、云い且つ市

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

語り報國隊隊長の意向を尋ねしめたるに彼等は弾薬欠乏を理由として進撃を難ずるの色ありと言い、別に怨けしき獣面をあらわしたるにも拘らず、弾薬の不足を説くに至りては、如何にも其意を得ざることにて、是れ全く意気の沮喪せる、意気の沮喪せる軍勢をもってしては縦い小敵に対するとも必勝を期すべからざるが故に余は遺憾乍ら進撃を思い止まる、而かも余は如何にしても今後を以て長岡藩戦亀之記を撰するに同志の諸撃に当て隊る注目すべき記事あらんと思念しを以て日の中に長岡を恢復するいしと思念しを以て

前月二日今町の一戦以来官軍陣を縮め長岡城下より一二里の外翼の方、丰蔵金抄出せん

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

辺より東北へ廻らし乾の方十二深林の
遥まで大凡廣袤十里程山川の要害に拠
り胸壁を築き固守すれば岳対壘五十日程
の間信濃川西岸板城北より海邊出雲崎
遥まで同様の姿にて書夜砲声不絶(相)廢
要撃大小戰の毎度徒らに人数を傷い弾
薬を費し。何時可(休)止も不相見総督河井継
之助策を決し同十七日夜栃尾町に於い

山縣公史實調査會用紙

て諸藩集会同廿日迫長岡勢は間道より
長岡へ打入り諸藩は本道より総進撃に
決す但雨後田圃水多く廿四日迫迄日
同廿四日前晴号十人及び前軍銃子隊長
大川市左衛門、銃卒隊長千本木林吉、軍事
掛三富億次郎、銃士隊長花輪房右衛門銃
卒隊長棟小太郎、大隊長山本帯刀、二軍
銃子隊長稲垣林四郎、銃卒隊長篠原伊右

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12

衛門、銃卒隊長惣頭、弓
野田伊織、軍事掛り三間市之進、軍銃士
隊長波田進、銃卒隊長望月忠之亟、銃士隊
長小篠久馬、右衛門銃卒隊長奥山七郎右
衛門、軍事係ノ花輪久馬、本陣総督河井継
之助、並諸役員、後軍銃士隊指揮又兵衛今
泉岡右衛門、銃卒隊長四条直記、大隊長牧
野因書、銃卒隊長河井手吉、横田大助大隊
長稲垣主税、総計十七小隊役人ともに
余人、約束を厳令し糧食を負擔し、旗を巻
巾、鼓を包み夕落方時を
所沖と言ふ深田沿川の中を潜行し将
に宮下村に至らんとす時に月東山の間
にして、砦兵道に當り
往来するを見る密に
に伏し忍ふこと一
る間遥に月雲間に

国立国会図書館　山縣有朋伝記編纂資料(写本) 12